

詩篇 95 篇「主を礼拝するとは」

礼拝の初めに招詞としてみことばが朗読されます。招きの詞(ことば)と書きますが、私たちを礼拝に招いてくださっている神様のみことばということです。私たちが神様を礼拝することができるのは、神様が招いてくださっているからです。詩篇 95 篇は招詞によく用いられます。それは、この詩篇が文字通り、人々を神様に対する礼拝へと招いている、招きのことばになっているからです。しかし、この詩篇には礼拝への招きがあるだけではありません。この詩篇は礼拝者のあり方をよく教えています。

1. 喜び歌うことへの招き (:1~5)

まず、礼拝への招きがあります。この詩篇では2回、礼拝への招きを行っています。最初は1~5節です。

はじめに「さあ」と呼び掛けられています。原語では「行け」という命令の言葉です。その後になすべきことが言葉を重ねて語られています。私たちは「喜び歌おう」、「喜び叫ぼう」。「御前に進み」、「喜び叫ぼう」。誰に対してそうするのか。「主に向かって」、「私たちの救いの岩に向かって」、主の「御前に」、「主に」対してです。

イスラエルの神、主の御前に、喜び歌いながら出て行こうとの呼びかけが強調されています。喜びにあふれて、神様に近づいていく、そういう礼拝の始まりを思わされます。礼拝者たちが一つところに集まって主を礼拝するのにふさわしいあり方は、喜び歌うことです。

その喜びもちよとした喜びではありません。「そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水が湧き出し、荒れ地に川が流れるからだ」(イザヤ 35:6)。

荒野に水が湧き出したら、歓声をあげて、大喜びします。この預言はメシアによって救いが与えられることの預言です。救い主によって救われた喜びを、大喜びして、共に歌うのです。

「喜び叫ぶ」ということばは、聖書の他の箇所では戦いの時の雄叫びや見張りの声に使われていることがあります。全力で叫ぶときに使われます。「娘シオンよ、大いに喜び。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って」(ゼカリヤ 9:9)。この預言は、イエス様がろばの子に乗ってエルサレムに入られたことで成就しました。その時、人々は歓声を上げ、喜び叫んでイエス様を迎えました。

このように、礼拝の初めには、主に救われた喜びをもって、主の御前に出ることができる喜びをもって、主を賛美するようにと招かれています。

さらに「感謝をもって」「賛美をもって」、御前に出ていくように呼びかけられています。その理由は3節。

神様が偉大なお方だからです。その偉大さはどれほどでしょうか。4~5節。

神様はこの世界のすべてのものの所有者です。なぜなら、「主がそれを造られた」からです。そして、それらはすべて主の「御手のうち」にあります。主が常に支配しておられます。

天地万物を創造なさり、この世界を保っておられる神様の偉大さを知らされているので、また、その神様の御前に招かれているので、喜び歌い、御前に進み行くのです。

でも毎週のことだから、慣れてしまっているかもしれません。しかし、次の96篇では「新しい歌を主に歌え」と命じられています。救われて新しくされた者たちが、思いを新たにしてお祝いすることです。また、今日の礼拝は今日しか献げられないのです。神様が許してくださるから、様々なことが守られて礼拝を献げることができているのです。ですから、礼拝のたびに、感謝を新たにし、喜び歌うのです。

2. ひれ伏すことへの招き (:6~7前半)

次に2回目の招きがありますが、初めの招きとは違います。6節。2回目は「来たれ」で始まります。今度は、私たちは「ひれ伏し」「膝をかがめよう」「ひざまづこう」と招いています。この三つの動詞はどれも神様の御前で自分を低くすること、神様の御前にへりくだることです。ここでは私たちが神様に対して自分を低くするように招かれています。礼拝とは、神様の御前における自分をわきまえ、神様に栄光をお帰しすることです。神様に対して大きくなりすぎている自分を、もう一度本来の姿に戻すことです。

逆に、私たちの信仰における問題は自分の存在が神様に対して大きすぎることでしょう。時に神様を見失ってしまうことがあると思います。神様を信じていないのではありません。ただその時の自分を省みると、自分

自身のことが大きくなっています。神様を中心として神様の御前にひれ伏すことをしていないのです。

今、私たちはイスに座って礼拝を献げていますが、私たちの心は神様の御前にひれ伏したのでしょうか。ひざまずいたのでしょうか。そうでなければ、私たちは神様を礼拝したとは言えないのです。

その後に理由が言われています。7 節前半。神様が偉大なお方であると同時に、私たちの羊飼いでもあるから、私たちは神様を信頼して、へりくだって礼拝するのです。

7 節後半からの内容から分かるように、7 節前半も出エジプトの出来事を思い起こして語っていると思います。イスラエルの神、主は、エジプトで苦しんでいたご自分の民を顧み、モーセを立てて、エジプトから連れ出されました。モーセが持つ羊飼いの杖によって、主が不思議なみわざを行われ、ファラオに立ち向かわれました。杖を差し伸ばすと、葦の海が分れて、民は乾いたところを通りました。杖で岩を打つと、水が流れ出しました。まさに、モーセを通して主が羊飼いのようにイスラエルを導き、民が羊のようにモーセのもとに集まり、従いました。そして主が民を守り、導き、養ったのでした。

そのように羊飼いである主はご自身のもとに、羊である私たちを招いてくださいます。ですから、私たちは主のもとに集まり、ひれ伏し、ひざまずき、主を礼拝するのです。

3. 御声に聞き従う（:7 後半～11）

急に調子が変わります。7 節後半～8 節。礼拝とは神様の御声を聞くことです。礼拝者は、神様に向かって喜びをもって感謝と賛美を献げ、また、神様の御前にひれ伏します。そして、神様の御声を聞くのです。

教会の礼拝の中では、みことばが読まれ、メッセージが取り継がれます。人が用いられますが、みことばによって主がお語りになるのです。みことばとともに聖霊が働かれ、聞く人の心に主がお語りくださいます。

パウロはこう言っています。「私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした」（I コリント 2:4）。礼拝宣教のために、みことばを取り次ぐ者のためにぜひ祈っていただきたいのです。礼拝の本質は「神の御声」を聞くことにあります。

「今日、もし御声を聞いたら」と私たちにも問いかけています。礼拝に来たなら、必ず神様の御声を聞くのです。そうでないなら、礼拝になっていないのです。私たちは、毎週の礼拝において御声を聞いているかどうかを自分に問う必要があると思います。

そして、神様の御声を聞いたなら、「あなたがたの心を頑なにしてはならない」と命じられています。私たちはどうでしょうか。礼拝で聞いたみことばに従いますか。みことばを実行しようとしませんか。それが信仰者にとって大事なことです。

この詩篇ではその後に、イスラエル人の犯した、決定的な不従順を実例としてあげています。9～11 節。

エジプトから救い出されたイスラエルの民は、神様の救いの御業を経験してきたのに、荒野で「水がない」と神様につぶやきました。それがメリバ、マサでの出来事でした。そして、最終的には、約束の地の近くのカデシュまで来て、神様に対する決定的な不従順を表しました。彼らはカナンの地を偵察した 12 人の斥候のうち、不信仰な報告をした 10 人の言葉に従いました。神様を信頼せず、神様の約束のみことばに従いませんでした。その結果、イスラエルは荒野を 40 年放浪しなければならなくなり、エジプトを出たとき成人だった世代は、神様を信頼したカレブとヨシュア以外は皆、その間に死んでいきました。

このような過去の失敗の実例を挙げて、同じことを繰り返さないようにと訴えています。礼拝で聞く神様の御声に聞き従わないことも、同じ結果になると教えているのです。

ヘブル 3 章 12～15 節。神様の御声を聞くことのできる「今日」と言われている間に、神様のみことばに聞き従う必要があります。生ける神、主を礼拝するとは、みことばと聖霊によって私たちに語りかけてくださる主の御声を聞き、主を信頼して、従うことです。そのような私たちを主は「安息」に入れてくださるのです。

私たちは主日ごとに、共に大きな喜びをもって賛美しながら主の御前に出ていきましょう。主の偉大さと恵みを思い巡らし、主の御前にひれ伏しましょう。そして、主の御声を聞くことのできる「今日」のうちに、主を信頼し、みことばに応答して、従っていきましょう。